

氏名	井 下 逸 司
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 授 与 番 号	乙 第 1220 号
学 位 授 与 の 日 付	昭和56年9月30日
学 位 授 与 の 要 件	博士の学位論文提出者 (学位規則第5条第2項該当)
学 位 論 文 題 目	超音波による切迫流産予後推定に関する研究
論 文 審 査 委 員	教授 寺本 滋 教授 木本 浩 教授 折田 薫三

### 学 位 論 文 内 容 の 要 旨

妊娠83日(11週6日)までの切迫流産例の予後を推定するため、超音波診断装置を利用し、断層像スコアリングシステムと胎児心拍動確認法を考案した。断層像スコアリングには、羊膜腔最長径、胎児像、妊娠嚢(Gestational Sac:GS)構築、初期胎盤像の4つのパラメータを用いた。各パラメータは、その所見により0,1,2点の3段階に判定した。これらのトータルスコアにより予後を推定したが、妊娠55日まででは、3点以上、妊娠56日以降は、5点以上を予後良好と推定した。妊娠55日までの1点以下と妊娠56日以降の3点以下を予後不良と推定しその間を中間群とした。さらにProspective Studyを行ないその結果、中間群は妊娠55日までは126%、56日以降は90%であり、正診率はそれぞれ91.7%、97.5%であった。胎児心拍動は陽性を予後良好と推定した。その正診率は98.5%であった。妊娠63日(9週0日)以降の胎児心拍動陰性は予後不良と推定したが、正診率は100%であった。しかしながら妊娠62日(8週6日)までの胎児心拍動陰性、即ち中間群が16.0%と、かなり認められた。断層像スコアリング、胎児心拍動確認ともに、Prospective Studyにおいても高い正診率を有し、臨床上一十分有効であると考えられた。さらにこの両者を併用することにより、誤診率を0.9%にまで、減少させることが可能であると判明した。

### 論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

本研究は超音波装置を利用した切迫流産に関する臨床的研究であるが、切迫流産の予後推定について重要な知見を得たものでありその診断、治療上よりも価値ある業績であると認める。

よって、本研究者は医学博士の学位を得る資格があると認める。